

構文における創造性と生産性

——創造的な結果構文における非選択目的語の認可のしくみ

鈴木 亨

1. はじめに

本稿は、いわゆる創造的な結果構文において非選択目的語が認可される意味解釈上のしくみを明らかにすることを通じて、結果構文の創造性と生産性について考察する。¹

Boas (2003) は、結果構文における動詞と結果句の組み合わせに関して、その大半が慣用的なものであり、いわゆる創造的で新奇な事例は非常に限定的であり、従来の研究で想定されているほど構文としての生産性は高くないと論じている。そして、そのような見地から結果構文の構文としての特性の一般化は事実上放棄されている (Suzuki 2006参照)。本稿では、Boas が結果構文の生産性と創造性を過小評価しているとの認識から、非選択目的語を伴う結果構文の中でも、特に一回性の創造的で新奇な事例と見なされる結果構文における意味解釈のしくみを精査することにより、その構文特性を動詞の意味タイプに応じてある程度一般化された説明として提示することを試みる。さらに、関連構文との比較から、非選択目的語を伴う結果構文の構文としての生産性の低さは、主に文脈を含めた変件事象解釈の全体に及ぶ整合性の計算上の複雑さに起因し、逆説的にそこにこそ創造的と評価されうる表現が生まれる可能性を見いだすことができることを論じる。

2節では、Boas (2003) の用例基盤モデルによる類推分析を概観し、その潜在的な問題点を指摘する。3節では、Broccias (2007) における非選択目的語の認可条件について検討し、その説明に十分な妥当性がないことを論じる。4節では、具体的な事例分析に基づき、変件事象における力動伝達 (force transmission) と「部分／全体 (part/whole)」, もしくは「図／地 (figure/ground)」の意味解釈に基づく非選択目的語の認可のしくみについて提案する。5節では、Way 構文との比較を通じて、結果構文の創造性について考察する。6節が全体のまとめとなる。

2. Boas (2003) : 用例基盤モデルによる類推分析

Boas (2003) は、大規模なコーパス調査 (BNC) に基づき、結果構文における動詞と結果句の

1 本稿では、「結果構文」の名称の下で、いわゆる使役移動構文も含めて考察の対象とする。なお、例文中のボールド体表記はすべて、わかりやすさに配慮して執筆者が付したものである。

組み合わせに関して、その大半が慣用的なものであり、いわゆる創造的で新奇な (Boas の用語では、「非慣用的 (unconventional)」) 事例は非常に限定的であり、従来の研究で一般に想定されているほど構文としての生産性は高くないと論じている。Boas が依拠する用例基盤モデル (Usage-Based Model) (Langacker 2000) では、構文の諸特性は、個々の動詞が継承ネットワークを通じて、より基本的な動詞からフレームごとに事実上語彙指定として受け継ぐものとされる。この枠組みでは、大半の結果構文の事例は、多かれ少なかれ動詞を中心に結果句を含めたフレームが語彙化されたものであり、いわゆる新奇な事例は、場面を特定する文脈情報に加えて、より基本的と見なされるモデル動詞 (もっとも基本的なレベルでモデルとして機能する動詞として、make, push, pull, take, move などが挙げられている) からの類推 (analogy) に基づくフレームの継承によって認可される。

非慣用的な結果構文の事例分析として Boas (2003: 264-272) が唯一具体的に取り上げているのは、(1) の結果構文である。

- (1) He sneezed the napkin off the table.

Boas の分析を概略すると、次のようになる。動詞 sneeze が (1) のような結果構文のフレームで解釈されるために、空気の放出という点で意味的な共通性のある動詞 blow から結果構文のフレーム [NP V NP XP] が継承される。このフレーム自体はさらに基本的な動詞 push から、使役移動の意味解釈を伴って継承されたものである。また、blow から sneeze への継承には、空気の放出という2つの動詞の意味的共通性に加えて、sneezing の行為と the napkin の移動という出来事が連動して生じるという場面を話し手と聞き手が共有することが必要となる。以上を図式的に示すと (2) のようになり、その背後には (3a,b) のような blow と push に関する結果構文としての具体的用例の存在が想定されている。

- | | | | | |
|----------|---|-----------------|---|-------------------|
| (2) push | ⇒ | blow | ⇒ | sneeze |
| | | <caused motion> | | <emission of air> |
| | | [NP V NP XP] | + | |
| | | | | CONTEXT |

- (3) a. He blew the napkin off the table.
 b. He pushed the napkin off the table.

いいかえると、sneeze を (1) のような結果構文で使用するためには、話し手と聞き手の了解事項として、push の結果構文の用例として [NP V NP XP] の型とそれに合わせた使役解釈が blow に継承されていること、そして sneeze と blow が表す活動には「空気の放出」という意味の共通

点があること、さらに sneezing の行為によって the napkin が移動するという出来事を文脈知識として共有すること、この3つが揃うことによって初めて成立する類推プロセスが存在することになる。

しかし、非慣用的な結果構文の事例すべてにおいて、このような基本動詞との意味の類似と具体的用例に基づく類推プロセスが、話し手と聞き手のあいだに共有されていると考えることは妥当であろうか。例えば、(4) のような事例において基本のフレームを提供するのは、push, あるいは put ということになるかもしれないが、laugh にとって中間段階でのモデルとすべき動詞を想定するのはそれほど単純ではない。上で見た sneeze の場合のモデルとなった blow を選ぶには、laugh との意味的共通点が乏しいように思われる。

(4) John laughed tomato soup up his nose. (Verspoor 1997: 115)

(5) push/put ⇒ ?blow ⇒ laugh
 <caused motion> < ? >

新規な結果構文の生産性はたしかに限定的ではあるが、Boas (2003: 141, fn. 18) も認めているように、適切な文脈が与えられれば、その解釈自体は非常に容易である。²その事実を自然に捉えるには、結果構文を生成するしくみがそれなりに一般化されたかたちで存在することを認めたと上で、構文の使用における制約を明らかにすべきである。³

Boas の研究は、大規模コーパスを利用した検索によって、結果構文の慣用的側面を実証的に明らかにしたといえるが、一方でコーパスによる検索では実例を探しにくい(動詞と結果句の組み合わせにおいて語彙を指定できない)、創造的で新奇な結果構文については、それ以外のタイプの慣用的使用を重視するあまり、その創造的側面を支える構文としての実質を過小評価しているように思われる。本稿では、限定的であるとはいえ、創造的な結果構文の事例はそれなりに実在しており、そこには一般化に基づく一定の認可条件の説明が可能であることを示すことを目的としている。

3. Broccias (2007) : 移動シナリオによる非選択目的語の認可条件

Broccias (2007) は、認知文法の枠組みで、結果構文の中でも特に非選択目的語を伴うタイプが認可される解釈条件として (6) を提案している (Broccias 2007: 13)。

2 結果構文の産出の相対的な困難さ、構文としての限定された生産性の問題については、5節であらためて取り上げる。

3 Goldberg and Jackendoff (2004: 562) は、Boas の研究成果を評価しつつも、構文としての自律的な生産性、ひいては一般化を事実上認めようとしない方法論的アプローチに疑義を呈している。同様の点について Suzuki (2006) も参照。

(6) **The Motion Scenario Implication (MSI):**

If an unsubcategoryed object of a transitive verb appears as the constructional object in an RC, then the RC codes either 1) a **motion scenario** relative to the subcategoryed object by way of the change complex or 2) a **motion scenario** relative to the subject and the subcategoryed object by way of the verb.

移動シナリオという概念に基づくこの条件によると、当該の結果構文において非選択目的語が生じるのは、①変化の複合体（＝非選択目的語と結果句）によって、選択目的語に関する移動シナリオが指定される場合と、②動詞の意味を介して、主語と非選択目的語に関する移動シナリオが指定される場合であるということになる。

たとえば (7) の場合、①に従って、変化の複合体 the Ten Commandments into her children において、the Ten Commandments が動詞に本来的に選択される目的語 her children の内部に入るという移動シナリオが、前置詞 into を介して成立するとされる。また、(8) の場合は、②に従って、動詞 head の意味する活動内容が、主語 Zola (サッカー選手) と本来の目的語 the ball (= 放出物) とのあいだに「移動シナリオ」を喚起し、下位事象 1 (Zola headed the ball into the net) と下位事象 2 (Chelsea went in front/level) が統合的に解釈されるとされる。

(7) Don't be afraid to beat the Ten Commandments into your children. (Rivière 1995: 363)

(8) Zola headed Chelsea in front. (Broccias 2007: 7)

SUBEVENT1 : Zola headed the ball into the net.

SUBEVENT2 : Chelsea went in front/level.

移動シナリオに基づく (6) の認可条件は、さらに再帰代名詞を伴う事例 (9a-c) にも適用されているが、その分析はかなり恣意的な印象を受ける。

(9) a. Penny hammered herself silly.

b. Milton read himself blind.

c. Milton thought himself into a frenzy.

Broccias (2007: 12-13) によれば、(9a) は、hammering の行為から発生する (金属の) 騒音が Penny に入り込むことで彼女が silly な状態になるので、騒音に関する移動シナリオが成立するとされる。(9b) の場合は、読書行為は、本の上での人間 (の意識) の移動と概念化することができ、(9c) の場合は、思考は思考者との関係で移動する事物と見なされるので、それぞれ移動シナリオに当てはまると論じられている。しかし、(6) の条件を (10) のような事例に適用してみると、その

ような説明が恣意的であり、妥当性を欠くことが明らかになる。想定される説明は、次のようなものである。(10) の変化複合体 the campground empty は、経路を表す前置詞を含まないので移動シナリオを喚起しない (6-1)。また、放出活動の動詞ではない frighten の場合、放出／移動のシナリオも成立しない (6-2)。しかし、理屈の上では、frighten が働きかけの対象に向けて負の心理的インパクトを放出し、相手にダメージ (恐怖心) を与えると考えerことは、(9) の hammer の事例分析に照らせば、さほど不自然とはいえない。⁴

(10) *The bears frightened the campground empty.

Broccias の移動シナリオによる分析の問題点は、非選択目的語を伴うすべての事例を (6) の認可条件に還元して説明しようとすることにより、解釈の適用が恣意的となり (特に (6-2) の適用に関して)、説得力に乏しいということである。次節では、まず当該の事例に関連する動詞タイプを分類し、タイプごとにより精緻な意味的制約を提案し、その範囲で一般化された説明を試みる。

4. 力動伝達 (force transmission) と「部分／全体」・「図／地」の意味論

4.1. 力動伝達と動詞の分類

結果構文における変化事象を力動伝達 (force transmission) (Talmy 2000参照) の観点から捉え、特に非選択目的語の生起に関して、事象参与者間の「部分／全体 (part/whole)」, もしくは「図／地 (figure/ground)」の関係性に基づく認可条件の分析を提案する。その際に、結果構文に関わる動詞を、(11) のように状態変化他動詞と非能格動詞の2つのグループに分け、さらにその下位タイプに応じて、力動伝達の形式 (12), 及び「世界知識 (world knowledge)」と「文脈情報 (contextual information)」の関与のしかたが体系的に異なることを論じる。⁵

(11) 2つの動詞グループとその下位タイプ

4 (10) は、frighten の本来の目的語 the campers が表示されていないので、非選択目的語 the campground とのあいだで「部分／全体」の関係が復元できないという点で構文の認可条件を満たしていないと考えられる (4節参照)。しかし、形容詞 empty が PP を用いて補部をとることができる可能性を考えると、(ia) に対して (ib) が容認されないのはなぜかという疑問が残る。

(i) a. The bears frightened the campers out of the campground.

b. *The bears frightened the campground empty of the campers.

(ib) では、たしかに「部分 (the campers)」と「全体 (the campground)」の2つの要素が表示されているが、その構造関係が通常の「部分／全体」、あるいは「図／地」の逆、つまり、「全体 (地)」の方が「部分 (図)」よりも構造的に上に位置していることが、適正な解釈の妨げになっているのではないかと考えられる。「部分 (図) / 全体 (地)」の構造上の逆転が解釈の容認度を下げerことは、Talmy (2000: 314) の次のような例で知られている。

(ii) a. The bike is near the house.

b. ?The house is near the bike.

5 「世界知識」と「文脈情報」の区別については、Pustejovsky (1995) を参照。本論文に先立つ試行的分析として鈴木 (2012) を参照。

[1] 状態変化他動詞

- ①能格動詞 (break, burn, freeze, melt, etc.)
- ②心理インパクト動詞 (charm, frighten, scare, surprise, etc.)

[2] 非能格動詞 (身体活動動詞)

- ①身体活動他動詞 (接触動詞) (beat, bite, cut, kiss, pound, stroke, etc.)
- ②身体活動自動詞 (bark, blink, bounce, cough, cry, dance, drink, eat, laugh, listen, play, read, run, sing, sleep, snap, sneeze, snore, stare, swim, talk, walk, wince, etc.)

(12) 力動伝達の形式

- a. SUBJECT → <force> ⇒ PART OBJECT (= part) + PATH (= whole)
- b. SUBJECT → <force> ⇒ PART/CONTIGUOUS OBJECT (= part/figure) + PATH (= whole/ground)
- c. SUBJECT → <force> ⇒ CONTIGUOUS OBJECT (= figure) + PATH (= ground)
- d. SUBJECT → <force> ⇒ SELF/BODY PART OBJECT (= figure) + PATH (= ground)
- e. SUBJECT → <force/emission> ⇒ SURROGATE OBJECT (= figure) + PATH (= ground)

4.2. 状態変化他動詞と非選択目的語

状態変化他動詞については、ここでは2つの下位タイプとして能格動詞と心理インパクト動詞に分けて考えるが、両者の事例に共通するのは、本来的に動詞に選択される目的語、すなわち動詞活動の作用 (force) の直接の受け手 (force recipient) が、目的語位置に後続する PP 内部に「降格」され、目的語位置に非選択目的語が生じるという構図である。力動伝達の観点からは、非選択目的語と本来の目的語との間に成立する「部分／全体」、あるいは「図／地」の関係に基づき、動詞活動の作用が全体 (WHOLE OBJECT) からその部分 (PART OBJECT) に伝達され、部分が全体から分離する変件事象の解釈 [PART OBJECT MOVE FROM WHOLE OBJECT] が得られることになる。

4.2.1. 能格動詞

能格動詞の場合、全体から部分へという力動伝達解釈との整合性から、一般に分離方向の形状変化を意味する動詞に限定され、非選択目的語と本来の目的語とのあいだの「部分／全体」関係は、基本的に「世界知識 (world knowledge)」, すなわち、言語コミュニティにおいて広く共有される知識体系に基づいて保障される。

(13) 能格動詞 (形状変化動詞)

- a. He **broke** some grapes off the branch.
- b. She **melted** the handle off the coffee pot. (Google 検索に基づく作例)

c. It [= strong spirits] **burned** the road down my throat. (Tracy Chevalier, *Remarkable Creatures*)

d. ...hotel bedrooms that **freeze** your eyebrows to the pillows... (David Lodge, *Small World*)

(13a) のぶどうの房とぶどうの木の枝の「部分／全体」の解釈や, (13b) の取っ手とポットの「部分／全体」の解釈は, 世界知識によって保障される。(13c) は, アルコール度の強い酒を飲むとどが灼けるような感触がするという「世界知識」に基づく創造的表現である。(13d) は, 能格動詞としてはやや例外的に, 分離とは反対の接近方向の位置変化を表すが, 寝ているときの眉毛と枕の位置関係の理解は「世界知識」による。ちなみに, (13c, d) における「部分／全体」関係は事後的な関係であり, 恒常的に成立するものではないが, 解釈に要請される情報は, 基本的に「世界知識」によるものと考えられる。

4.2.2. 心理インパクト動詞

心理インパクト動詞の場合, その中でもより強い働きかけの影響性を持つ動詞が選ばれやすく, 非選択目的語と本来の目的語とのあいだの「部分／全体」の関係は, 「世界知識」よりも, 場面に限定的な「文脈情報」により大きく依存する。

(14) 心理インパクト動詞

a. He **frightened** the hiccups out of her. (Google 検索に基づく作例)

b. She **charmed/scared** the secret out of him.

c. I can merely grab Emile off the street and **torture** the information out of him. (Robert Ward, *Four Kinds of Rain*)

d. She stopped arguing, but she didn't give up. Sometimes she tried to **surprise** it [= calling the police] out of me, the way you can supposedly surprise someone out of the hiccups. It didn't work. (Stephen King, *11.22.63*) (彼女は私を驚かせるようなことを言って, ある情報を警察に密告させようとする)

例えば, (14a) において, しゃっくり (the hiccups) が一時的な人の保有物として見なされるのは「世界知識」によるが, 特定の人物 (her) がしゃっくりをしていることは, 「文脈情報」によって得られる知識である。また, (14b, c) における秘密や情報とその持ち主の関係も, 「文脈情報」によって特定される「部分／全体」の関係である。(14d) では, 後続する文脈であえて 'surprise someone out of the hiccups' という表現を引いて対照させることで, 適正な解釈へ読み手を誘導している点にも注目されたい。

4.2.3. 状態変化動詞のまとめ

能格動詞と心理インパクト動詞を含む状態変化動詞の場合、いずれも基本的には義務的な他動詞であることを反映して、本来の目的語が必ず述部の PP 内に表示され、非選択目的語とのあいだで「部分／全体」、あるいは「図／地」の解釈関係が成立すること（復元されること）が、非選択目的語を伴う結果構文の認可条件となる。その際に、能格動詞の場合は「世界知識」が、心理インパクト動詞の場合は「文脈情報」も加わって、それぞれ情報の補完により重要な役割を果たすことから、場面依存性がより強い後者よりは、前者の方がより安定した構文表現を提供しやすい動詞タイプであると考えられる。

4.3. 非能格動詞と非選択目的語

非能格動詞は、広く人間の身体活動を表す動詞であるが、ここでは義務的に目的語を選択する他動詞とそれ以外の自動詞に大きく分けて考察する。

4.3.1. 身体活動他動詞

身体活動他動詞は、一般に対象物（本来の目的語）への接触行為が語彙的に規定されているが、被影響性（affectedness）の含意は必ずしもない。しかし、非選択目的語を伴うこれらの動詞の結果構文では、動詞活動の作用が本来の目的語を経由して、そこから非選択目的語に及ぶという力動伝達の解釈が得られる。本来の目的語は後続する PP 内に「降格」され、新たに導入される非選択目的語と本来の目的語とのあいだには、「部分／全体」、あるいは「図／地」の関係が成立する。ここでの非選択目的語は、状態変化動詞（特に能格動詞）の場合と違い、本来の目的語を恒常的に構成する部分ではなく、むしろ動詞活動の場で文脈的に規定される偶有的な近接物（CONTIGUOUS OBJECT）であり、その点では、同じ状態変化動詞の中でも文脈依存度のより高い心理インパクト動詞の結果構文が表す事象に近いともいえる。そもそもこのタイプの動詞は、いずれも活動にある種の強度（インパクト）が含意されているのが特徴である。

また、能格動詞の場合は全体から部分の離脱変化が主であったが、身体活動他動詞の場合には、分離に加えて、反対方向の接近（進入）の方向性を持つ移動も少なからず存在する。(18) と (19) に、それぞれ分離と接近（進入）の例を文脈とともに挙げる。他にも (20) のような事例がある。分離の場合には、変化の生じる前の時点で、「部分／全体」の関係が成立し、接近（進入）の場合には、変化後の結果状態として「部分／全体」の関係が成立しているともいえるが、いずれも文脈依存性の強い一時的な関係であるため、「図／地」の関係と見なすのがより妥当であろう。

- (18) Helen was impressed that people so primitive should have taken the trouble to bury their dead at this inconvenient site. Was it because it was at the top of a hill, where the earth was nearest to the sky? Did they have an idea of heaven, a place up above, where the individual's spirit

would go after death, she wondered. Messenger **kissed these questions from her lips**. (David Lodge, *Thinks...*)

(古墳跡を散歩しながら古代の人々が死後の世界にどんな想いを抱いていたのかあれこれ考えていた Helen は、いっしょにいた Messenger にいきなりキスされる。「部分 (図)」としての疑問 (these questions) はもともと「全体 (地)」としての彼女の唇 (her lips) にあ
るわけだが、この偶有的関係は「世界知識」では記述できないので、発話に先行する文脈
で彼女が抱えている具体的な疑問が提示されている。)

(19) “Put the belt in your mouth.”

She put it between her lips.

“Bite when it hurts.”

“When it hurts.”

“Bite the pain.”

“I’ll catch it.”

(...)

“...Carol, are you ready?”

“Ready.”

“When the pain rises, what will you do?”

“Catch it. **Bite it [= the pain] into Bobby’s belt.**”

“Good girl. Ten seconds and you are going to feel a lot better.”

(Stephen King, *Hearts in Atlantis*)

(話し手は、肩を脱臼した少女 Carol の口にベルトを噛ませ、応急処置の痛みをがまんさせようとする。痛み (the pain) とベルト (Bobby’s belt) の関係は「世界知識」ではないので、先行文脈で、話し手がそばにいた少年 Bobby のベルトをはずさせて、脱臼した少女の口にあてがう場面が提示されることで、biting の行為による力動伝達の経路としての「図/地」の関係が確定される。)

(20) a. Don’t be afraid to **beat the Ten Commandments into your children**. (Rivière 1995: 363)

b. He **stroked the signs of weariness off her face**. (ibid.: 364)

c. Her deft fingers **cut elegance into that old coat of mine**. (ibid.: 364)

d. I thought I could **pound the fear of God into him**. (Robert B. Parker, *The Boxer and the Spy*)

4.3.2. 身体活動自動詞

身体活動自動詞の下位分類は、その境界が連続的で必ずしも明確ではない場合もあるが、大まかな分類として、全身的な活動と特定の身体部位に特化された活動があり、さらに後者には、空

気や声、液体など具体的な放出物が含意されるクラスがある。

(21) 身体活動自動詞の下位クラス

- ①全身活動動詞：bounce, dance, run, sleep, swim, walk, wince
- ②身体部位活動動詞：blink, drink, eat, listen, snap
- ③放出活動動詞：bark, cough, cry, laugh, piss, sing, sneeze, snore, stare, talk, weep

身体活動自動詞が非選択目的語を伴う事例に共通する特徴として、元来自動詞であるため、場面における偶有的な近接物 (CONTIGUOUS OBJECT) である非選択目的語は、「部分／全体」の関係として復元されるべき本来の目的語を持たないという点がある。そのかわり、動詞活動の作用が偶有的な近接物に及ぶ力動伝達の経路を保証するための「文脈情報」が不可欠となる。全身活動動詞では (22)、身体部位活動動詞では (23) のような例がある。

- (22) a. On the bus, Judy showed Rocky her new pet. “I couldn’t wait to show everybody how it eats. Now it won’t even move. And it smells.”

“Open Sesame!” said Rocky, trying some magic words. Nothing happened.

“Maybe,” said Rocky, “the bus will **bounce it** [= **the flower**] **open**.”

“Maybe” said Judy. But even the bouncing of the bus did not make her new pet open up.

(Megan McDonald, *Judy Moody*)

(Judy は、クラスみんなに見せるために食虫植物 (= it) を持って通学バスに乗るが、昨晚から花が閉じたままなので心配している。友だちの Rocky は、バスの振動によって花が開くのではないかと期待している)

- b. ... it [= another gust of wind] made them both **wince their eyes shut**.

(Stephen King, *Insomnia*)

(強い風を受けとっさに身じろぎをした勢いで目を閉じる)

- c. ... Emma decided that it was time to call it a day, take her slice of wedding cake in the special velvet drawstring bag, head up to her room and **sleep the wedding off**. (David Nicholls, *One Day*)

(昔のボーイフレンドの結婚式に出席して気落ちした Emma は、部屋に戻ってぐっすり眠ることで今日の出来事を忘れてしまおうと思う)

- (23) a. I snapped everything back to life. (Nicholson Baker, *Fermata*)

(語り手は特殊な能力により指を鳴らすことでまわりの物の動きを時間的に止め、またその状態を解除することができる)

- b. He blinked this arrangement away and began to eat. (Ian McEwan, *Solar*) (頭を悩

ませている和解案をとりあえず無視して食事を始める)

「部分／全体」に相当する関係が事実上復元される身体活動他動詞の場合とは異なり、身体活動自動詞の場合は、意味強制 (coercion) により活動の強度が誇張されて解釈されるのが一般的であり、そこからさらに派生的に、身体からの異物の除去というシナリオ (図=異物／地=身体) と結びついて、前置詞 away/off を固定語彙とする構文イディオムを形成していると考えられる事例も多い(用例基盤モデル的にいえば、'take X away' や 'put X off' が基本モデルということになる)。

- (24) a. He tried to **blink the grisly vision away**. (Stephen King, *Insomnia*)
 (恐ろしい光景を目にして思わず瞬きをする)
- b. Let him **walk it [= carsick] off**. (Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go*)
 (車から出て歩いて車酔いをさまそうとする)
- c. You can **{dance/run/swim} your fat off**.

4.3.3. 構文イディオムと慣用句依存型

身体活動動詞では、構文イディオム化がもっとも進んだ例として、再帰代名詞や身体部位を非選択目的語とする過剰な身体活動を、文字通り、あるいは比喩的な誇張として表現する結果構文がある。このタイプは生産性が高く、動詞選択の自由度も高い。

- (25) a. We **laughed ourselves sick, me literally**. (Joe Pernice, *Meat is Murder*)
 (文字通りの読みと比喩的な読みがあることを示している)
- b. I have [...] **googled myself blind**, but have not yet found a solution. (Google 検索)
- c. He **smokes himself into double vision**. (Squeeze, "In Quintessence" from the album *East Side Story* (1981))
- (26) a. He could hear his father as he did it, **snoring his head off**. (Sarah Waters, *The Night Watch*)
- b. We **laughed our brains out**. (Stephen King, *Hearts of Atlantis*)
- c. At seventeen and fifteen, respectively, Thomas and Timothy could **ski the pants off their parents...** (John Irving, *A Widow for One Year*)⁶

また、本来の目的語を介して非選択目的語を動詞活動の作用に関連づけることのできない自動詞の場合、適切な解釈を成立させるために、より多くの「文脈情報」が必要とされると考えられるが、既存のことわざや慣用句を共有される背景知識として利用する事例が少なからず存在する。

6 (26c)における the pants は、字義通りの身体部位とはいえませんが、イディオム性の強い 'the pants (off)' の表現では、衣類が換喩的に拡張されて身体部位として解釈されていると考えられる。

- (27) a. **Apple the doctor away.** (Mike Keneally & Beer For Dolphins, “Potato” from the album *Sluggo!* (1997))
(りんごを食べてからだを丈夫にしよう；ことわざ ‘An apple a day keeps the doctor away’ 「毎日りんごを食べていれば医者や遠ざけることができる」から)
- b. She didn’t do anything while I told her but listen. She didn’t drink coffee or eat or tap her fingertips together, or frown or smile or move. Susan could **listen the ears off a brass monkey.** (Robert B. Parker, *Cold Service*)
(精神科医の Susan は聞き上手で、黙ってひたすら私の話を聞いてくれる；慣用表現 ‘cold enough to freeze the balls off a brass monkey’ 「とても寒い」から)
- c. Jerome ... **coughed the frog from his throat.** (Zadie Smith, *On Beauty*) (言いよどんでいたことを口に出すため咳払いをする；慣用句 ‘have a frog in one’s throat’ 「のどに痰がからむ／声がかれている」から)

4.3.4. 放出活動動詞と代行目的語

非選択目的語を伴う身体活動自動詞の下位タイプとして、発声器官などから声や空気、液体等を放出することによってその活動様態が特徴づけられる放出活動動詞がある。

- (28) a. She **laughed** my remark off.
b. He **talked** us into a stupor.
c. The neighbor’s dog **barked** me awake.
d. She **sang** her baby to sleep.

これらの動詞が、本来自動詞でありながらも、その活動のターゲットとして潜在的な対象を持ちうることは、前置詞を伴った (29) の例からもわかる。

- (29) a. She laughed at my remark.
b. He talked to us.
c. The dog barked at me.
d. She sang to her baby.

動詞活動の放出物 (emission) が、潜在的な対象、あるいは偶発的な近接物 (CONTIGUOUS OBJECT) に作用し、一定の変化をもたらすという事象解釈が、このタイプの基本である。上で見た構文イディオムの事例と同様に、活動そのものに強意の読み (活動の強度や継続時間が尋常

ではないという含意) が加わるのが通例である。

(28) では、活動の潜在的な対象が非選択目的語となっているが、偶有的な近接物が生じる事例としては、(30) のようなものがある。この場合、いずれも意図せざる偶発的な出来事として、解釈には否定的なニュアンスが伴う。

- (30) a. Frank **sneezed** the tissue off the table.
b. I nearly **hiccupped** my coffee down the wrong tube. (Google 検索)
c. I nearly **coughed** my tea over the monitor. (Google 検索)
d. Please do not **snore** me awake. (Google 検索)

放出物の含意が重要であることは、次のような例で、液体の放出物にそれぞれ特有の効果が結果として生じていることから示唆される。

- (31) a. Freddy **cried the handkerchief wet**. (Vanden Wyngaerd 2001: 71)
b. I've **pissed myself free**. (Mikael Niemi, *Popular Music from Vittula*)
(氷点下の厳寒の屋外で誤って自分の肌を金属製のドアにつけて凍結させてしまったという文脈で、語り手は自分の小便の熱によって凍結した部分を溶かして体をドアから引きはがす)

このような放出活動動詞が用いられる場合に、含意される放出物に別の代行物 (SURROGATE OBJECT) をいわば比喩的に重ねて、潜在的な対象物への接近 (進入) を表す事例が存在する。(32a) では him が、(32b) では hands がそれぞれ動詞活動の潜在的な対象物であり、移動変化の「図/地」の解釈における「地」と解釈される。

- (32) a. She **stared daggers at him**. (Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go*)
(慣用句 'look daggers at' 「にらみつける」に基づく)
b. I **weep my relief into this stranger's small, meaty hands...** (Khaled Hosseini, *The Kite Runner*)

代行目的語が「図」として「地」に接近 (進入) するという解釈は、いわゆる放出活動動詞に限らず、4.3.1で見た強い接触を表す身体活動他動詞の例とも共通するが、どちらのタイプも具体的な放出物を伴わなくとも、本来的に強い活動エネルギーの放出が語彙的に含意されており、文脈上導入される偶有的な近接物を、それ自体がエネルギーを担う代行目的語として読み替える解釈が得やすくなっている。

4.4. 非選択目的語の種類と「世界知識」／「文脈情報」への依存

これまで見た動詞タイプとの組み合わせで、さまざまな非選択目的語が力動伝達の観点からそれぞれ認可される際に必要となる意味情報の種類についてまとめると、次のようになる。

(33) [1] 動詞の本来的目的語を構成する部分 (PART OBJECT)

← 「部分／全体」に関する世界知識と必要に応じた文脈情報

- 状態変化動詞：break, freeze, melt
- 心理インパクト動詞：frighten, scare, surprise

[2] 動詞活動の潜在的／偶発的な働きかけの対象 (PART/CONTIGUOUS OBJECT)

← 世界知識と「図／地」に関する文脈情報

- 身体活動他動詞（接触動詞）：beat, bite, cut, kiss, pound, stroke
- 身体活動自動詞（全身活動と身体部位活動）：bark, blink, bounce, cough, cry, hiccup, laugh, piss, sing, sleep, snap, sneeze, snore, stare, talk, walk, weep, wince
（放出活動動詞と代行目的語 (SURROGATE OBJECT) の事例を含む。）

[3] 動詞の活動主体（＝再帰代名詞），またはその身体部位 (SELF/BODY PART OBJECT)

← 機能不全からの強意解釈として構文イディオム化

- 身体活動自動詞一般

状態変化他動詞の場合には、基本的に「世界知識」に依存した「部分／全体」の関係性に基づいて力動伝達の経路が確定される。つまり、原則として本来の目的語の一部を構成するものだけが非選択目的語として認可される。「部分／全体」の解釈を成立させるために、復元可能であることが要請される本来の目的語は、PP内に「降格」されることによって「世界知識」に基づく解釈条件が満たされるので、文脈依存度は相対的に低いといえる。

一方、身体活動動詞の場合には、本来の作用の受け手を語彙指定する他動詞では、「部分／全体」の確定に「世界知識」も関与するが、非選択目的語の選択肢が偶発的な近接物に広がるので、むしろ解釈に必要な場面を特定するための「文脈情報」への依存度が相対的に高くなる。また、状態変化他動詞の場合とは異なり、「部分／全体」の関係を前提としない、つまり本来の目的語に相当する事物が存在しない自動詞の場合には、変件事象の解釈を確定する上で、「図／地」の関係性を補完する「文脈情報」が必須となる。

動詞の他動性と自動性を対比する観点から、非選択目的語の認可における「世界知識」と「文脈情報」への依存度は概略次のようにまとめられる。

(34) 動詞の他動性／自動詞性と「世界知識」／「文脈情報」への依存度

動詞の他動性	⇔	動詞の自動性
部分／全体 (←世界知識)	⇔	図／地 (←文脈情報)
全体を構成する部分	⇔	偶有的な近接物／放出物の代行

5. 結果構文における創造性とは何か

5.1. 結果構文と Way 構文

結果構文と Way 構文はいずれも、無標の単純な文表現に対して、事象の特異性に焦点を当てる機能を持つ構文であるといえるが、生産的とされる Way 構文に比べて、結果構文の生産性は非常に限定的であることが、Goldberg (1995), Boas (2003) などの先行研究によって示唆されている ((35-36) の例文は, Goldberg (1995: 217) から一部改変)。

- (35) a. He **bludgeoned** his way through.
 b. The players **mauled** their way up the middle of the field.
- (36) *He **bludgeoned** himself crazy.
 *He **mauled** himself crazy.

Way 構文で使用される動詞は、非能格動詞を中心に多様な事例があり、特異な「様態 (manner) / 手段 (means)」を指定する動詞の例も少なくない。大室 (2000) は、2つの動詞を組み合わせた事例 (韻を踏む事例も少なくない) が多く観察されることなどから、Way 構文における動詞の選択は、多くの場合表現効果をねらってかなり意識的になされていることを示唆している。

- (37) a. We **bumped and stumbled** our way around the dance floor again. (Robert B. Parker, *Chasing the Bear*)
 b. We **laughed and joked** our way through the session... (Geoff Emerick and Howard Massey, *Here, There and Everywhere*)
 c. He **snored and farted** his way through the small hours... (Ben Watt, *Patient*)

さらに、一般動詞と特殊な経路表現の組み合わせによって、事象全体の特異性を表す場合も多い。(38) では、ごく一般的な動詞が用いられているが、それぞれ動詞と組み合わせられる経路が特殊であることによって、全体として特異な状況が描写されている。

- (38) a. Sally **drank her way through a case of vodka**. (Goldberg 1995: 204)
b. The Beatles never just **played their way through an album's worth of new songs** as a four-piece rock band in the way the Stones and most other groups did. (Barry Miles, *Paul McCartney: Many Years From Now*)
c. ...it seems as though there was at least one madman (or woman) every month **shooting his or her way into history books**. (Michael Heatley with Spencer Leigh, *Behind the Song: the Stories of 100 Great Pop & Rock Classics*)
d. The secret had **worked its way through their marriage**. (Kim Edwards, *Memory Keeper's Daughter*)

以上のような観察から、Way 構文における創造的な表現は、動詞と経路句の組み合わせによる複合表現において、動詞か経路句のいずれかに事象の特異性を示唆する語句が選択されることによって、全体としての機能を満たすものと考えられることができる。

一方、結果構文では、類似した意味グループの中でも使用頻度の高い基本的な動詞が生じる事例が多く、より特殊な活動様態を指定する動詞を利用すると容認度が下がる傾向が指摘されている (Boas 2003: 162)。

- (39) a. Erin **ate** her plate empty.
b. ?Erin **swallowed** her plate empty.
c. *Erin **devoured** her plate empty.

ただし、4.3.3で見たように、再帰代名詞や主語の身体部位を機能不全結果句と組み合わせる構文イディオムタイプでは、動詞選択の自由度は高く、構文的な生産性も高いといえる。また、文脈情報への依存度が比較的低い他動詞（とりわけ強い働きかけの作用が含意される動詞）の場合は、PP 内に本来の目的語が表示される形式で、比較的特殊な様態指定を持つ動詞も生起することができないわけではない。

- (40) The war **bludgeoned** the self-respect out of them. (Google 検索に基づく作例)

このような Way 構文と結果構文に見られる構文的な生産性の違いは、主に両者の非選択目的語の資格の違いに起因すると思われる。つまり、Way 構文では、構文の「目的語 (one's way)」がイディオムとして固定されているので、話し手が特異な事象の描写として意図的に語彙を選択する余地があるのは、動詞か経路句のいずれかということになり、その選択に創造性が発揮されることになる。

一方、結果構文では、動詞と結果句の選択に加えて、「(非選択) 目的語」の選択が原則としてオープンであることが、話し手と聞き手のあいだで共有されるべき情報（「世界知識」や「文脈情報」）を含めた、文全体の整合的解釈の計算に複雑さを加えていると考えられる。上で見たように、再帰代名詞や身体部位表現が語彙的に指定されることにより「目的語」が固定された構文イディオムでは、結果構文でも、Way 構文と並行的な生産性が認められる。しかし、イディオム化の進んでいない非選択目的語を伴う結果構文では、「部分／全体」あるいは「図／地」の関係に基づく非選択目的語の解釈を成立させるための潜在的な計算の複雑さが、構文としての生産性を抑制しているのである。また、その中間的な存在として、異物除去のシナリオに沿って away/off を固定語彙とするタイプ (24) や、心理インパクト動詞を用いた情報の引き出しタイプ (14b-d) を、構文イディオム化が進行中の結果構文として位置づけることも可能であろう。

5.2. 非選択目的語と結果構文の創造性

文の構成要素の潜在的な組み合わせの複雑度という視点から、これらの構文の創造性について考えてみよう。Way 構文では、動詞と経路句の組み合わせ自体が新奇性の判断基準となるが、通例、動詞の選択、あるいは動詞と組み合わせられる経路表現の選択のいずれかにおける特異性が、新奇さの印象を与えることになる。再帰代名詞や身体部位を伴う結果構文の場合は、構文イディオム化が進み、結果句が広い意味で機能不全状態を描写することが固定されているので、事実上動詞の選択によってのみその新奇さが測られることになるだろう。

一方、イディオム性の低いそれ以外の非選択目的語を伴う結果構文では、動詞の選択というよりも、本来動詞とは意味選択関係のない非選択目的語を変化主体とする変化事象が、「世界知識」と「文脈情報」に支えられて、いかにして全体としての整合的な解釈を与えられるかという点に、創造性を見いだすことができる。つまり、個別の語彙の選択というよりも、「世界知識」や「文脈情報」を含めた、動詞、非選択目的語、結果句という組み合わせが、全体として、創造性、もしくは新奇性の評価の対象となる。動詞活動からの強いエネルギーの作用、もしくは放出という点を除くと、動詞、目的語 (= 図)、移動経路／結果状態 (= 地) というそれぞれの構成要素の選択がオープンなので、文脈を含めて整合的なシナリオを成立させるための計算の複雑度が高くなる。それゆえに、創造的であるのか、それとも逸脱的であるのかという判断も、広い意味での文脈の共有度や慣用表現の認知度等によって、個人差が生じることも十分に考えられる。

5.3. 非選択目的語と AP 結果句

最後に、非選択目的語を伴う結果構文において、PP 結果句に比べると、AP 結果句の事例が少ない点についても触れておく。これまで見てきたように、非選択目的語の生じる結果構文では、構文イディオム化された機能不全解釈の場合を除いて、結果句として機能しているのは、その多くが PP である。

そもそも結果構文一般に生じる形容詞の種類が限定的であることは、さまざまな先行研究で指摘されているが、そのひとつの理由として、複合事象の解釈における動詞の語彙アスペクトのスケールと形容詞に内在するスケールの整合性という要因が考えられる（詳しくは、Wechsler 2005, Beavers 2008を参照）。

また、すでに状態変化他動詞の事例で見たように、非選択目的語は、力動伝達解釈を保障する「部分／全体」関係が復元される必要があり、そのために「降格」された本来の目的語が表示されねばならず、通例補部を明示できる PP の存在が要請されることになる。なぜなら、形容詞は一部の例外を除いて NP を補部として表示することができないからである。

さらに、非能格動詞の場合には、話し手と聞き手のあいだで、多かれ少なかれ当該の変化事象に関して文脈情報の共有が要請されるが、多くの形容詞が表す抽象的な価値判断 (famous, important, poor, worthless など) は、外面的な状態変化 (clean, dry, empty, hard, thin など) に比べて、直接知覚・認識することが難しい。そのため、非選択目的語を伴う場合だけではなく結果構文一般に、結果句として典型的に生じる形容詞は、事物の内面的な価値判断ではなく、外面的に直接観察可能な変化の特性を表すものに限定される傾向があると考えられる。

6. おわりに

本稿では、非選択目的語を伴う結果構文の中でも、いわゆる創造的な事例とされるタイプにおいて非選択目的語が認可される意味解釈のしくみについて、具体的な事例に基づき、体系的に一般化された説明を与えることを試みた。このタイプの結果構文に生じる動詞を状態変化他動詞と非能格の身体活動動詞に分類し、さらにそれぞれの下位クラスに応じて、「部分／全体」、もしくは「図／地」の関係に基づく力動伝達解釈の成立可能性が、非選択目的語を認可するための意味制約として機能していることを示した。特に、状態変化他動詞である能格他動詞や心理インパクト動詞の場合は、文脈依存度が低いため、PP 内に本来の目的語が表示される限りにおいて非選択目的語を認可することが比較的容易であることを見た。それに対し、身体活動動詞の場合は、Way 構文と類似性のある構文イデオム化の事例を除いて、動詞の本来的な自動性が強くなるにつれて意味解釈の文脈依存度が高くなると同時に、変件事象の全体的整合性の計算が複雑になり、結果として構文的な生産性の低さにつながることを示唆される。しかし逆説的に、そのような条件で成立する結果構文こそが、高度に創造的であると評価されるものと考えられる。

* 本稿は、日本英文学会東北支部第6回大会 SYMPOSIA 「周辺的な事例分析から考える結果構文の再評価—形式・意味・言語使用の観点から」における執筆者の発表「結果構文における非選択目的語の意味解釈」に基づいている。質問やコメントをいただいた参加者の方々に感謝する。本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号24520528）の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

- Beavers, John (2008) "Scalar Complexity and the Structure of Events," in J. Dölling, T. Heyde-Zybatow and M. Schäfer (eds.), *Event Structures in Linguistic Form and Interpretation*, 245-265, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Beavers, John (2011) "On Affectedness," *Natural Language and Linguistic Theory* 29, 111-170.
- Boas, Hans C. (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*, CSLI Publications, Stanford.
- Broccias, Cristiano (2003) *The English Change Network: Forcing Changes into Schemas*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Broccias, Cristiano (2007) "Unsubcategorized Objects in English Resultative Constructions," in Delbecque, Nicole and Bert Corneille (eds.), *On Interpreting Construction Schemas: From Action and Motion to Transitivity and Causality*, 103-124, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry* 21, 171-211.
- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A Constructional Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Goldberg, Adele and Rey Jackendoff (2004) "The English Resultative as a Family of Constructions," *Language* 80, 532-569.
- Langacker, Ronald (2000) "A Usage-based Model," in Kemmer, Suzanne and Michael Barlow (eds.), *Usage-based Models of Language*, 1-63, SCLI Publications, Stanford.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1991) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge.
- Mateu, Jaume (2002) *Argument Structure: Relational Construal at the Syntax-Semantics Interface*, Doctoral dissertation, Universitat Autònoma de Barcelona.
- McIntyre, Andrew (2004) "Event Paths, Conflation, Argument Structure, and VP Shells," *Linguistics* 42, 523-571.
- 大室剛志 (2000) 「One's Way 構文の意識的使用について—Kirchner (1951) の観察を中心に」, 『英語教育』 6月号, 34-36.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*, MIT Press, Cambridge.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) "An Event Structure Account of English Resultatives," *Language* 77, 766-797.
- Rivière, Claude (1995) "Résultatifs Anglais: Un Conflit Entre la Syntaxe et al Sémantique," in Franckel and Robert (eds.), *Langue et Langage, Mélanges Culioli*. P.U.F., 359-372.
- Suzuki, Toru (2006) "Between Conventionality and Compositionality: The Resultative Construction

Deconstructed?” *English Linguistics* 21, 211–211.

鈴木亨 (2008) 「結果構文の半生産性と創造性のありか」, 金子義明他 (編) 『言語研究の現在』, 187–196, 開拓社.

鈴木亨 (2012) 「変化事象における非選択目的語の意味解釈のしくみ—世界知識と文脈情報の関与」, 『山形大学人文学部研究年報』 第9号, 153–169.

Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics, Vol. I: Concept Structuring Systems*, MIT Press, Cambridge.

Vanden Wyngaerd, Guido (2001) “Measuring Events,” *Language* 77, 61–90.

Verspoor, Cornelia Maria (1997) *Contextually-dependent Lexical Semantics*, Doctoral dissertation, University of Edinburgh.

Wechsler, Stephen (2005) “Resultatives Under the ‘Event-argument Homomorphism’ Model of Telicity,” in Erteschik-Shir, Nomi and Tova Rapoport (eds.), *The Syntax of Aspect*, 255–273, Oxford University Press, Oxford.

例文の出典

Baker, Nicholson (1995) *Fermata*, Vintage.

Chevalier, Tracy (2010) *Remarkable Creatures*, Plume.

Edwards, Kim (2006) *Memory Keeper’s Daughter*, Penguin Books.

Emerick, Geoff and Howard Massey (2007) *Here, There and Everywhere: My Life Recording the Music of the Beatles*, Gotham.

Heatley, Michael with Spencer Leigh (1998) *Behind the Song: the Stories of 100 Great Pop & Rock Classics*, Sterling Publishing.

Hosseini, Khaled (2004) *The Kite Runner*, Bloomsbury Publishing.

Irving, John (1999) *A Widow for One Year*, Ballantine Books.

Ishiguro, Kazuo (2006) *Never Let Me Go*, Faber and Faber.

King, Stephen (1995) *Insomnia*, Signet.

King, Stephen (2001) *Hearts in Atlantis*, Pocket Books.

King, Stephen (2012) *11.22.63*, Hodder & Stoughton.

Lodge, David (1988) *Small World*, Penguin Books.

Lodge, David (2001) *Thinks...*, Penguin Books.

McDonald, Megan (2002) *Judy Moody*, Candlewick.

McEwan, Ian (2011) *Solar*, Vintage Books.

Miles, Barry (1998) *Paul McCartney: Many Years From Now*, Henry Holt & Co.

Nicholls, David (2010) *One Day*, Hodder & Stoughton.

- Niemi, Mikael (2004) *Popular Music from Vittula*, Seven Stories Press.
- Parker, Robert B. (2006) *Cold Service*, Berkley.
- Parker, Robert B. (2009) *The Boxer and the Spy*, Puffin Books.
- Parker, Robert B. (2010) *Chasing the Bear*, Speak.
- Pernice, Joe (2003) *Meat Is Murder*, Continuum International Publishing.
- Smith, Zadie (2006) *On Beauty*, Penguin Books.
- Ward, Robert (2007) *Four Kinds of Rain*, Minotaur Books.
- Waters, Sarah (2006) *The Night Watch*, Virago Press.
- Watt, Ben (1997) *Patient: The True Story of a Rare Illness*, Grove Press.

Creativity and Productivity in Grammatical Constructions : Licensing of the Unselected Objects in Innovative Resultatives

Toru SUZUKI

The purpose of this paper is to consider how creative uses of the unselected objects in the resultative construction are licensed in semantic interpretation. From the perspective of ‘force transmission,’ we examine two general types of verbs, namely change of state verbs (transitive ergatives and verbs of psychological impact) and physical activity verbs (transitive and intransitive unergatives), arguing that each subtype of these verbs utilizes world knowledge and contextual information in a slightly different way in licensing their unselected objects. In particular, transitive ergatives and verbs of psychological impact are likely to be the better hosts of unselected objects because they require less contextual information to establish the part/whole relation in force transmission due to their basically transitive nature; physical activity verbs, on the other hand, are generally more dependent on contextual information in licensing their objects, thus yielding less productivity and possibly more uncertain judgments. The nature of creativity of the resultative construction is also discussed in comparison with the *way* construction. It is suggested that the most creative aspect of the innovative resultatives lies in the complexity of computing coherency in the change event in its entirety.